

七夕に寄せて



森 下 博 三

夏の風物詩の中で、代表的なものに七夕祭りがあげられる。一般的に知られた中国の伝説をひろうと、

「昔、天は一つの王国であり、星はそこに住む人であると考えられていた。天帝の娘織女は天の川の西に住み、王の衣にする布を織るのに精を出し、自分のなりふりには一向にかまわなかった。

この織女をふびんに思った王は、天の川の東に住み、国内で評判の高い農夫のけん牛とめ合わせた。ところがそれからというもの、織女は働くことを忘れ遊んでばかりいるので、王は怒り、織女を天の川の西にもどして、昔のように布を織らせることとし、一年に一度だけ七月七日に天の川を渡ってけん牛に会うことを許した。天の川は普段は水が少ないが、雨が降ると水量が増して渡れなくなってしまう。その時にはかささぎ（鵲）という鳥がたくさん飛んで来て、羽根を広げて橋を作り渡してやった」中国では、この日を祝って機織や裁縫が上手になるように祈ったので、

奈良時代にこの中国の風習と、わが国固有のたなばたつめ（棚機つ女）の信仰とが習合して、宮中の儀式とされた後広く民間において行われるようになり、庭前に祭壇をもうけて供物をそなえ、葉竹を立てて五色の短冊に歌や字を書いて飾り、書道や裁縫が上手になるように願いを星に託した。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

七夕の主役星である琴座の主星ベガ（中国名で織女・和名をおりひめ）は、○・一等星と北天第三位の光度をもつ青白色の星で、その光度は太陽の約五十倍、直径は約二倍半もある大きな星である。一方、鷲座の主星アルタイル（中国名をけん牛・和名を彦星・うしかいぼし・いぬかいぼし）は光度○・九等で白黄色、その光度は太陽の約九倍に相当する。織女と地球との距離は二十七年、けん牛は十六光年の彼方にある。一光年とは天文単位で、真空中を伝わる光の速さを約三〇万キロメートルとして計算

すると、実に九兆四千六百キロメートルであるから気の遠くなるような話である。しかし、けん牛はそれでも割合地球に近い星で、現在知られている恒星の中では、地球から三十五番目の星である。織女とけん牛の間は約十六光年とされているから、天の川を渡って会いに行くとしても大変な話で、伝説のイメージも薄れ勝ちである。しかし、今私たちの目に入る二星のまたたきは、それぞれ二十七年前と十六年前の光であると考えるとき、また別の感慨がわかないものでもない。現在では七夕星は織女とけん牛の二星のように思われている向きもあるが、むかしは各々両側に一つずつの星をともなつて、三つ星として知られていた。なお、織女は今から約一万二千年の後には、天文学上の歳差と呼ばれる現象によって天球の北極に当たり、北極星としての役割を演ずることと計算されている。

☆ ☆ ☆ ☆

飛驒の高山に育った私にとって、七夕は夏休み中の楽しい行事の一つであり、夜おそくまで公認で遊べるときでもあった。これの準備には相当長い日数を費したもので、ある人たちは町の中を流れる宮川に、グループごとに四疊から六疊敷位の方形の島を作り、川の中から石を拾い集めて積み上げることには日中の盛りを過ぎ、木材で鳥居や檣を組み仕掛花火などのわく組みを作った。

大体小学生が主体で、時として中学生や大人が手だすけにまわる位で、非常に粗末なものではあったが、それでも子どもたちにとっては体いっぱい満足感があふれ、おやつさえ忘れるほどであった。一方、川から離れた城山に住んだ私にとって、川の中の祭がうらやましく、また仲間入りできないのが残念ではあったが、家の庭先や池の端に作る祭壇のために、当日のことを夢に描きながら兄たちの手伝いとしてこきつかわれたものである。ポール紙で鳥居や灯籠を切り抜き、チョークで塗って地面にさせるようにこわれた番傘の骨をはりつけた。くす玉や短ざくは包装紙や千代紙を使って作り上げたものだが、短ざくをお願いごとを毛筆で書く段になって、兄妹に対してのためらいなど、楽しい中での一時的な苦しみもあった。

準備に目を重ねた七夕祭りの前日は、やたらと天気が気になって一生懸命の中で神々にお願した。それにもかかわらず、折角準備した祭壇が雷雨で流されたときなど、窓ガラスに顔をくっつけて雨にたたかれる竹飾りをうらめしく眺め、悲しさにくちびるをかんだものであった。幸い天気にも恵まれたときなど、普段は少しでも遊べる昼間の長い方がよいのに、このときばかりは早く夜にならないものかと思ひ、灯籠や提灯に火を入れて、外界から祭壇が浮き上がって来る時刻が待ち遠しかった。祭壇にはしゅ

んの野菜や果物、赤飯や菓子などが供えられ、はりめぐらしたしめなわと竹飾りの色紙が対比してローソクの光の中に浮かび上がり、おかし難いものに見えた。線香花火が空間を引き裂くような音を立てて飛び散り、にえたぎった消える寸前の火の玉に全神経がはりつき、地面に吸い込まれてわれに返った。

一刻の楽しい家中の団らんを終わって、供物や葉竹などを持って七夕送りに川に向かった。宮川での水面にうつる教知れぬ島のまんどろと花火を、どよめく人混みをおしわけて橋から橋へと見て回った。すっかり暗くなった夜空に、ポンポンと軽い音がして、赤・青・黄の火の玉が尾を引いて吸いこまれ、いつしか満天に光る星となった。時の経過とともにその星々はいっそうの輝きを増し、太筒の打上げ花火と歓声はいつはてるともしれない。こうした天の川にも匹敵する川祭りは子ども心に消すことのできないものであった。

今では、こうした素朴な行事も、都会化した街や村から消え去りかけて、七夕祭りといえは人集めのための観光的・商業的な道具として扱われるようになり、出てくる飾りの中には現代漫画の主人公や時の話題の人、それに宇宙ロケットやパンダのぬいぐるみ、またやたらと大きいプラスチックやビニール製のくす玉などがすき間もなく天井からぶら下がっている姿は、本来の星祭りの

主旨とはほど遠いものとなった格好である。

折角、星を祭るといふ西洋にはない風習をもつ民族として、いかにささやかではあったにしろ、自分たちの手で育て伝えて行く心があつてもよいのではないだろうか。実際の七夕は旧暦の七月であつて、新暦とは約一カ月の差がある。七夕星が天頂に輝くのも八月であるし、七月の日本はその大部分が雨期のため晴夜は望みにくい。こうした点からみて、ただ七月七日にこだわる必要はないと思う。

最近の大気の汚染は、都会のみならず地方にも広がり、かつては満天に降る如くに見ることのできた星々も、輝度の強いものしか見受けることができず、子どもたちにとって、楽しめるべき星座の勉強もできなくなってきたことは非常に悲しむべき現象である。

小さな子どもたちにとって、より美しい自然の中で手をひろげてのびのびと成長する権利はあり、一日も早く自然の美しさを取り戻すことによつて、住みよい地球とすることが、これを汚した人間に課せられた責務というものではないだろうか。

(東京天文台)